

反核医師の会 HANKAKU ISHI no KAI News ニュース

Physicians Against Nuclear War (PANW)
核戦争に反対する医師の会
〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-5-5
新宿農協会館 全国保険医団体連合会内
電話 03(3375)5123 FAX 03(3375)1885
e-mail: panw@doc-net.or.jp
http://no-nukes.doc-net.or.jp/

第32回反核医師のつどい in 兵庫を開催

非核「神戸方式」を全世界に

第32回反核医師のつどいin兵庫が9月24、25日の2日間で開催された。3年ぶりに対面とWebを併用した。こどもは3つの講演とシンポジウムが開かれた他、オンライン企画として神戸港の見学ツアーも行われた。各イベントの概要や参加者の感想を1面から3面で紹介する。

2000人超が参加し 核廃絶の重要性を確認

実行委員長 西山 裕康
(兵庫県保険医協合理事長)



開会あいさつに立つ
西山実行委員長

松井和夫氏が、この取り組みの一環として同懇談会で行った金融機関調査結果を報告した。

立命館大学の安齋育郎名誉教授は、ウクライナ危機後、国内で勢いを増す「核武装論」「核共有論」の危険性と、メディアの情報を鵜呑みにする危険性を語った。

原水爆禁止兵庫協協会事務局長の梶本修史氏は神戸港入港の軍艦に「核兵器を積んでいない」「核兵器を積んでいない」証明書義務付ける非核「神戸方式」の意義と、それを実現・維持させている神戸市民の運動を紹介した。

神戸から「核兵器も原発もなくそう」の声を世界へ。9月24日～25日、「第32回核戦争に反対し核兵器の廃絶を求める医師・医学者のつどい(反核医師のつどい)」が兵庫県保険医協協会会議室とオンラインで行われた。医師・歯科医師ら2000人超が参加し、かつてないほど核兵器使用の脅威が高まっているなか、「核抑止力論」の欺瞞性と核兵器禁止条約の重要性、非核「神戸方式」の意義、福島第一原発事故の被害者のいまなどを学び、核兵器廃絶・原発

ゼロの実現に向けて、取り組みを進めようと確認した。24日は、ICANの金融セクターコーディネーターであるスージー・スナイダー氏がメインスピーカーとしてオンラインで講演。ロシアのウクライナ侵略に対し国際社会で効果的に使用された道具は、金融に対するアクションであり、同様の取り組みを核兵器に対して行う「Don't Bank on the Bomb」(核兵器にお金を貸すな)について紹介した。

近畿反核医師懇談会の松井和夫氏が、この取り組みの一環として同懇談会で行った金融機関調査結果を報告した。



全国から来場とオンラインで2000人超が参加し、交流を深めた

「核兵器を積んでいない」証明書義務付ける非核「神戸方式」の意義と、それを実現・維持させている神戸市民の運動を紹介した。

25日は、「東日本大震災―福島第一原発事故とその後」と題したシンポジウムが開催され、郷土秀夫・核戦争を防止する兵庫医師の会代表をコーディネーターに、齋藤紀・福島医療生協理事、小出裕章・元京都大学原子炉実験所助教、石田仁・元大熊町副町長、広川恵一・兵庫県保険医協会顧問の4人が話題提供し、原発事故は終わっておらず、被害が継続していること、原発ゼロを実現することが必要であることを確認した。

企画終了後のオンライン企画として「非核『神戸方式』見学ツアー」を含め、世界各地の非核地帯条約を広げるとともに、原発ゼロを実現するために奮闘する決意です」などとするアピールを読み上げ、拍手で承認された。

第33回反核医師のつどいin北海道
2023年9月23(土)・24日(日)
開催決定!

●10月4日早朝、携帯の「Jアラート」が鳴り響き朝鮮民主主義人民共和国(以下朝鮮)の弾道ミサイルの発射が知らされた。その後すべてのテレビ番組が弾道ミサイル放送一色になり、国民に警戒を呼び掛けた。まるで朝鮮が日本に戦争を仕掛けたかのような大騒ぎだった。●そもそも日本の上空1000kmを飛んだミサイルは「日本の上空」をはるかに超えた宇宙空間を飛んでおり、日本を狙ったものではないことは明らかだ。「Jアラート」が朝鮮危機を煽り、日本を戦争国家路線に乗せるための自公政権の姑息な謀略であることは明白だ。●核兵器を保有する米、その核の傘の下にある韓・日に包囲された困難な状況下で、社会主義・反帝自主の道を貫く朝鮮の戦争抑止策が核実験や弾道ミサイル発射を行きつくという状況を私たちはどう考えるべきだろう。●もちろん、私は「核」に「核」で立ち向かうのは反対だ。それでは平和は達成できない。しかし、米国内の「国際社会」は、アフガニスタンを侵略し、イラクを崩壊させ、核開発計画を放棄したりリビアを破壊し福祉国家から世界最貧国へ転落させた。私たちは、東アジア非核平和地帯構想の声を朝鮮に向け発するべきだ。しかしその声の百倍を、米・日・韓に届けるべきではあるまいか。

(S.O)

三回お話し

原発立地自治体である大熊町の元副町長である石田氏は、原発事故後から現在までの町と住民の実態を報告。事故直後、初期被曝への防護もできないまま、住民の避難を強いられ、事故以前の原発防災対策は机上の空論であったことを実体験に基づいて指摘。自治体には、廃炉・除染・中間処理施設・避難指示解除・復旧・復興等と膨大な課題に取り組むことが求められているが、小さな自治体でも対応できるわけがないと批判。将来の健康被害への不安や、さまざまな分断と対立・差別、いじめ、11年経過しても帰れない帰還困難区域、避難指示解除後の対応に対する不安、帰還後の追加被曝の不安、加害者側の不誠実な対応などにより、被災者は疲れ切っているが、一方で、被災地は風化させられていくと語った。

広川氏は、東日本大震災・福島第一原発事故後被災地訪問を続けてきたとして、各地域で出会った人々と、その歴史を紹介。原発立地候補地となった岩手県沿岸北部にある田野畑村で、その危険性を訴え、住民をまとめて計画を撤回させた「開拓保健婦」の岩見ヒサさん。避難生活で体調を崩し、帰還困難区域に指定された飯館村に戻って、理想の花園づくりを進める大久保金一さん。原発事故の賠償金で、境内に反原発・平和の発信拠点「伝言館」を開いた宝鏡寺の早川篤雄住職。原発事故を予見したかのようなたった原発の危険性を訴えた南相馬市の詩人・若松丈太郎さんなど、それぞれの地域で生き、闘う人々を紹介した。



石田仁氏(左) 広川恵一氏(右)

齋藤氏は、原発事故という巨大な複合的被害のなかで、福島で子どもたちの診療にあたってきた立場から、甲状腺がんの問題をどう考えるかを提言。さまざまな調査・研究結果から福島原発事故による子どもの甲状腺がんの過剰発症は現在のところ臨牀的、疫学的に認められず、被曝線量の過小さを踏まえれば、今後権威率レベルで放射線誘発性甲状腺がんとしての過剰発症は生じ得ないと考えられ、これから生きる子どもたちを医学的に問題視し、調査対象化し続ける社会的理由はないとし、心配だからと求められている検査は臨床医として当然行うが、学校健診として行うような無症状の子どもの甲状腺エコー検査は回避すべきと訴えた。



小出裕章氏(左) 齋藤紀氏(右)

ただ現在においても甲状腺エコー健診に関する評価は定まっておらず、実際に300人を超える小児にがんが発見されその多くが手術と云う

実害を被っていることは否定できない事実であり、現在も子ども被曝裁判と「親子裁判」として係争中であることは厳然と申し述べておきたい。

その後、被曝の影響の評価や甲状腺検査のあり方等について、活発に意見が交わされ、郷地氏は、原発は人と相いれないこと、被災者に寄り添った支援が必要で、国と東電

がきちんと責任をとるべきこと、放射線の影響はデータの不確かさ等わからないことも多く、不安があるのだから、検査は医療人の役割で、それは国が保障すべきこと、現場の医療者を支えるのが、それ以外の医療者の役割であることをまとめとして提起して、確認された。



郷地秀夫氏

原水禁世界大会

概要報告

8月4日～6日、原水爆禁止2022年世界大会が広島で3年ぶりに現地でハイブリッド開催の良



写真はヒロシマデーのラストに全国から寄せられたペナントを掲げる参加者

概要報告
会議の冒頭、7歳のとき広島島で被曝した児玉三智子さんが自分の体験から核兵器の非人道性について語った。韓国の被爆者や、マーシャルの核実験被害者の報告もあった。
テーマ別集会「核兵器廃絶—ウクライナ危機を考える」ではウクライナやロシアの反戦平和活動家の声を直接聞くことができた。チェルノブイリ原発事故で甲状腺癌になり手術を受けたニーナ・ポタルスカヤ(ウクライナ)さんは「男性が軍に取られて女性の果たす役割は増えているが何の補償もない。さらに家族のケアも行っていない。」と訴えた。アーシャ・マルケット(ロシア)さんは「ロシアでは青と黄色の服をきてSNSに投稿するだけで反戦ととらえられる。『いいね』してもダメ。あらゆるものが取り締まりの対象となっている。ウクライナでも反戦とか非暴力という考えの人は人権抑圧されている。ロシアの人々は排除されている。両方の国で人権が抑圧されていることを知って欲しい」と語った。
被爆者の平均年齢は84歳を超え直接話を聞ける時間は限られている。今回、全体会議で質問した小学生も含め多くの若者の参加があり次の世代への継承を感じることができた。
(監査 矢野正明)

近畿反核医師懇談会・市民公開オンライン企画 沖縄と核

~恐怖と隣り合わせの島で~
米軍占領下、核ミサイルの暴発事故やキューバ危機を受け中国各都市に向け発射寸前だった戦術核ミサイル、島の生活を破壊した核爆弾投下訓練など、沖縄は東アジア最大の核基地でした。
この沖縄と核の実態について、アメリカで資料調査や当事者たちへの取材を重ね制作された番組「NHKスペシャル 沖縄と核」のディレクターであり、同名の書籍を発行されている松岡哲平さんをお招きして、沖縄と核の実態と、ウクライナ危機や中国の脅威が強調され、核配備や核共有が叫ばれる今、実際に核が配備された沖縄の住民の実態はどうだったのか、お話いただきます。
ぜひお誘いあわせの上、ご参加ください。

日時 2023年2月23日(祝・木) 15時~17時
講師 松岡 哲平さん (NHK広島放送局ディレクター)
会場 M&Dホール&オンライン講演
住所 大阪市浪速区幸町1-2-33 電話 06-6568-7731
・地下鉄なんば駅下車・地下鉄出入り口26-Aをあげる(徒歩5分)
会場定員 50人
※どなたでもご参加いただけます。ご来場の方は、下記申込書をFAXして、「Zoom」による視聴をご希望の方は、下のQRコードより事前登録をお願いします。お問い合わせは、078-393-1807兵庫県保険医協会事務局・小西、平田まで

【Zoomによる視聴の申し込み】
下のQRコードもしくはアドレスから登録フォームにアクセスできますので、前日までにご登録をお願いします。自動返信メールでアクセス方法等をお知らせします。
https://bit.ly/3ViucqD



千鳥橋病院の核兵器禁止条約推進宣言の取り組み

千鳥橋病院 副院長 角銅 しおり



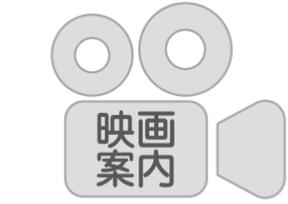
千鳥橋病院は、福岡市内にある3500床の総合病院である。民医連に加盟しており、創立以来、被爆者医療や反核平和活動をおこない、職員教育にも平和学習を積極的にとりいれている。

2021年2月核兵器禁止条約への認識調査を実施。①核兵器禁止条約を知っている？には「知っている」が96・3% ②条約が発効されたことを知っているか？には「知っている」には77・3%の回答があった。2021年3月22日 ICAN 川崎哲氏の講演「核兵器

「長崎の郵便配達」

この映画は、大戦中戦闘機パイロットとして活躍し、その後ジャーナリストになり世界をめぐるピーター・タウンゼント氏が、長崎で谷口稜暉

さんに会い、被爆体験をインタビューしノンフィクション小説「長崎の郵便配達」を出版したことから始まる。娘の俳優で2人の娘の母親でもあるイザベル・タウンゼントが、父親の死後、この本を読み、長崎で父親の足跡をたどりながら、亡くなったしまった谷口さんとの思いを紐解いていくというドキュメンタリー映画である。河瀬美香監



監督が、谷口さんのこの本の復刊に熱意を持っていてたことイザベルさんに出会ったことで映画製作が開始された。長崎の被爆者団体をはじめ財政的にも含めた多くの支えで完成したものである。最後のエンドロールでは、長崎県保険医協会も名前が出ている。全編生の声で、日本語字幕となっている。私のような年齢には、字幕は少々厳しいが、1



禁止条約「発効」を核なき世界へのスタートに」を院内webで学習した。2021年4月22日当

院で長年被爆者医療に携わってこられた熊谷芳夫医師に「福岡医療団の被爆者医療と職員へのメッセージ」というテーマで

00分近く、見入ってしまった。一度ではと思いきる内容となつていて、原爆や戦争を全く知らない世代を含めてあらゆる世代の人に是非見てもらいたい、強く思わせられた映画であった。

被爆者医療と核兵器をなくすための活動が強く本日の被爆者の活動が強く感銘が寄せられた。



「ローマの休日」のモチーフになったといわれる元英空軍大佐ピーター・タウンゼント。彼が出会ったのは、スミテル少年だった。

会費納入のおねがい

反核医師の会は、会員のみなさまの会費と、主旨に賛同いただいている募金によって運営しています。2022年度(2022年4月1日~2023年3月31日)の会費納入のほど、よろしくお願ひいたします。

個人会員 (医師・歯科医師、医学者)	10,000円
研修医 (卒後2年まで)	3,000円
医・歯学生会員	1,000円
賛助会員	1,000円

振込先
◇りそな銀行 新都心営業部 普通 1557502 「反核医師・医学者の集い」
◇ゆうちょ銀行 (他銀行からの振り込みの場合) ○一九支店 当座 0056764 「反核医師・医学者の集い」
◇郵便振替 00170-7-56764 「反核医師・医学者の集い」

た。内容は、条約の推進や子供たちに残したい未来、平和について寄せられ、その中の一つ一つの言葉をつなぎ完成した宣言を作成した。

地域や患者さんに核兵器廃絶と千鳥橋病院の核兵器禁止条約推進宣言のアピールとしてうちわを作製し、1500枚を外来患者さんや地域の宣伝行動で配布した。

連帯メッセージを募り、各団体や友の会などからも激励のメッセージが届き、約1年がかりで、「No Nukes 核なき未来へ」千鳥橋病院核兵器禁止条約推進宣言が完成した。2022年6月に記念講演を開催することを決定し、長崎大学核兵器廃絶研究センター准教授 中村桂子先生を招いて開催した。中村先生からは、核のない世界なのか、核戦争をする世界なのか、岐路に立たされている。1発の核兵器が放射されたその瞬間から世界が変わりゆく動画を紹介され、その脅威と非人道的な兵器であることをまざまざと見せつけられた。命と人権を守りぬこうとする私たち医療従事者は、核兵器が使用される可能性がある世界を直視し、人類と核兵器は共存できないということを改めて確認した。これからも核兵器廃絶に向けて取り組んでいく一歩を医療現場から、地域から推し進めていきたい。